

受賞報告

白根 和樹 先生

第67回日本小児血液・がん学会で優秀ポスター賞 受賞

演題「P22-6 主要血管の温存を試みた後腹膜奇形腫の2例」



受賞者からひとこと

昨年11月に福岡にて開催されました第67回日本小児血液・がん学会において、当院で経験した主要な血管を巻き込んだ後腹膜奇形腫の2例をポスター発表させていただきました。

症例1は上腸間膜動静脈を巻き込んだ腫瘍だったのですが、上腸間膜動脈と腫瘍の剥離が困難で、腫瘍は垂全摘する形になりました。術後に2回ほど消化管穿孔も発症しており、治療に難渋した一例でした。

症例2は左腎動静脈を高度に圧排した症例だったのですが、症例1の経験を踏まえて術前に嚢胞部分をドレナージしたところ、血管の圧排が軽減され、無事に腫瘍のみ全摘出することができました。難しい症例が数多く紹介される当院ですが、日々工夫して治療を行っていることが伝わったのではないかと考えております。

優秀ポスター賞は、昨年度まで在籍していた盛島練人先生の受賞に続き、2年連続での嬉しい報告となりました。今後もモチベーション高く、学術活動に励んでいきたいと考えております。

XX

池川 健 先生

日本小児循環器学会 Case Report Award 受賞

演題「Potential of Fetal Electrocardiography Monitoring in Evaluating Treatment Indications for Fetal Supraventricular Tachycardia」



受賞した論文の概要

当院で使用している胎児心電図装置は国内のみで使用可能な機器で、海外で使用されている装置と比較して、妊娠週数にかかわらず使用できることに加え、胎児心電図波形をベッドサイドで簡便に確認できるという特長があり、優れた精度で胎児心電図波形を取得することが可能です。一方で、この装置の臨床応用の経験はまだ限られており、実際の診療にどのように活用するかについては、現在も試行錯誤が続いています。当院では実臨床に活かすために積極的にこの装置を用いています。今回、当院での経験の中から、実臨床において有用であった症例を報告しました。

受賞者からひとこと

このたびは日本小児循環器学会のCase Report Awardをいただき、大変光栄です。当院の胎児心電図装置は、赤ちゃんの状態に振り回されることも多く、装置と根比べしながらのデータ収集を重ねています。それでも根気強く記録を続けた結果、胎児SVTの治療適応判断に役立つ知見をお示しできたのは大きな喜びです。今回の受賞は、日々ともに胎児に向き合ってくださっている周産期診療チームの皆様のおかげです。なかでも、妊婦さんと赤ちゃんを日々診療し、胎児心電図の記録にご協力くださった胎児診療・産婦人科の先生方に、心より感謝申し上げます。これからも粘り強く臨床研究に取り組んでいきたいと思ひます。今後ともよろしくお願ひいたします。



「第 23 回こども医療センター優秀論文賞」が決定いたしました。
令和8年7月15日に表彰式および受賞講演が行われました。
受賞者の皆さまをご紹介します。

【優秀論文賞】

● 齋藤 朋子 医師(新生児科)●

掲載誌 Pediatric pulmonology

論文名 Impact of Neurally Adjusted Ventilatory Assist Management
on Neurodevelopmental Outcomes in Extremely Preterm Infants

著 者 Tomoko Saito , Tomoyuki Shimokaze , Yoshinori Inagaki,
Takahiro Noguchi, Jun Shibasaki, Katsuaki Toyoshima

論文の要旨

早産児の人工呼吸管理では、肺障害や神経発達への影響を考慮し、早期抜管が重視されてきた。しかし、早すぎる抜管は呼吸の不安定さを招くこともある。本論文では、横隔膜電気活動を感知し、患児自身の呼吸努力に同調して補助を行う換気モードである神経調節補助換気(Neurally Adjusted Ventilatory Assist: NAVA)が、早産児の神経発達に与える影響を検討した。当センターNICUにおける在胎 27 週以下で出生した超早産児 82 例を対象とした NAVA 導入前後の比較では、NAVA 導入後に挿管期間は延長した一方、NAVA 使用は修正 18 か月時点の正常発達(発達指数 85 以上)と独立して関連した(調整オッズ比 2.99)。本研究は、挿管期間のみでなく、児の呼吸努力に同調した質の高い呼吸管理が長期予後に関わる可能性を示し、発達予後を見据えた超早産児の呼吸管理を考えるうえで、重要な知見である。



● 小野 晋 医師(循環器内科)●

掲載誌 The Canadian journal of cardiology

論文名 Peak Peripheral Venous Pressure-Oxygen Uptake Relationship
During Exercise: A Tool for Assessing Veno-venous Collaterals
in Fontan Circulation

著 者 Shin Ono, Sadamitsu Yanagi , Akio Kato , Takeshi Ikegawa,
Takuya Wakamiya, Shuichi Ito, Hideaki Ueda

論文の要旨

Fontan 循環における veno-venous collaterals(VVCs)は低酸素血症の原因とされる一方、その血行動態的意義は一定していない。本研究では、運動時の末梢静脈圧(PVP)と最大酸素摂取量(PVO₂)の関係に着目し、VVCs の機能的役割を検討した。89 例を対象に心肺運動負荷試験(CPET)中の PVP を測定し解析した結果、VVCs の有無により PVP-PVO₂ 係に有意な交互作用を認めた(P=0.0116)。PVO₂ 低値では VVCs は静脈圧上昇を緩和する代償的役割を示す一方、PVO₂ 高値では静脈圧負荷を増大させる可能性が示唆された。本研究は VVCs の「二面性」を明確に示し、運動耐容能に基づく個別化治療戦略の重要性を提起する。



【若手奨励賞】



● 大原 夕季 医師(アレルギー科)●

掲載誌 International archives of allergy and immunology

論文名 Comparative Safety of Baked Egg, Egg Yolk, and Egg White
in Young Children with Egg Allergy

著 者 Yuki Ohara, Yurika Matsumoto , Mayumi Fujita, Chisato Inuo

論文の要旨

鶏卵摂取による症状誘発歴のある 3 歳未満の卵アレルギー患者 97 名を対象に、baked egg(BE)、卵黄(EY)、卵白(EW)による経口食物負荷試験(OFC)の安全性を後方視的に比較した。BE 群 47 名、EY 群 23 名、EW 群 27 名で、年齢・アトピー性疾患の既往・卵白特異的 IgE 値に群間差はなかった。OFC 陽性率は BE 群 0%、EY 群 17.4%、EW 群 22.2%と、BE 群が有意に低かった(p=0.0011)。EY 群では軽度の皮膚・消化器症状、EW 群では呼吸器症状も認められたが、いずれの群もアドレナリン投与は不要だった。BE 群の陽性率が低かった要因として、負荷量や対象年齢、既製品による加熱条件の均一化の影響が考えられた。鶏卵アレルギーの乳幼児に対しても、少量の BE を用いた OFC は安全に実施可能であった。BE への耐性確認が食事制限の段階的緩和につながる可能性が示唆された。



● 波若 秀幸 医師(新生児科)●

掲載誌 Pediatric blood & cancer

論文名 Changes in Blood Test Indices of Infants With Down Syndrome-Associated Transient Abnormal Myelopoiesis

著 者 Hideyuki Hawaka , Tomoyuki Shimokaze, Tomoko Yokosuka, Katsuaki Toyoshima, Tomoko Saito, Hiroaki Goto

論文の要旨

ダウン症候群の一過性骨髄異常増殖症(TAM)の児では約 20%が生後早期に死亡し、その主因は肝不全である。TAM の児は診断時だけでなく、出生後の経過からも生命予後を予測することが重要である。しかし TAM 関連死亡の児と生存した児の間で、血液検査指標の時系列的な変化について、特定の期間とそれに対応する血液検査値を組み合わせた比較分析はこれまで行われていなかった。本研究は、1992-2024 年に当院に入院したダウン症候群 505 名のうち、TAM 関連死亡の児 12 名と生存児 39 名を後方視的に解析し、出生時から生後 3 週までの血液検査の経過から、生後 2 週時点での直接ビリルビン値が $51 \mu\text{mol/L}$ ($\approx 3.0 \text{ mg/dL}$)以上であることが感度 1.00、特異度 0.78、AUC 0.94 で早期死亡を予測する有用な指標である可能性を示した。生後 2 週以内に直接ビリルビン値がこの閾値へ上昇することは、生命予後に関する親へのカウンセリング、また低用量シタラビン療法などの治療を開始または強化する判断の重要な情報となり得る。

令和8年度 新規採択されました研究費のご報告

●令和8年度こども家庭科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

課 題 名 低出生体重児の就学前・就学期における支援手法確立に向けた研究

— 分野横断的アセスメントに基づく継続的家族支援—

研究代表者 新生児科 豊島 勝昭

●令和8年度科研費

12課題申請し、下記5課題が採択されました。

基盤研究(C)	全国調査に基づく地域における院内子ども虐待対応チームのネットワーク構築	総合診療科	森 里美
基盤研究(C)	早産児の発達支援に資する集団保育環境と保育者の支援ニーズの解明	新生児科	阿部(野口) 聡子
基盤研究(C)	胎児重症先天性心疾患における新規肺 MRI 評価と周産期管理アルゴリズムの確立	循環器内科	池川 健
基盤研究(C)	骨原発悪性腫瘍の機能的精密医療を実現する薬剤感受性プロファイリング検査の開発	血液・腫瘍科	後藤 裕明
基盤研究(C)	新規回転培養法を用いた成熟真皮・皮膚シートの開発	形成外科	小林 眞司

発掘後記

埴輪が作られた古墳時代には、「土師部（はじべ）」という人々がおり、土器や埴輪の製作、さらには古墳築造にも携わっていたといわれています。当時の豪族たちは、自らの古墳に数多くの埴輪を並べ、人々の敬意や関心を集めようとした。その期待に応えるべく、土師部の人々は技術を磨き、より優れた埴輪や古墳づくりを目指して腕を競い合っていたのかもしれない。

さて、「はにわ通信」も発行を重ねるごとに、みなさまの「リサーチマインド」はますます高まり、多くの研究成果が発掘されるようになりました。その結果、今回は豪華版の3ページです。日頃から「技術の開発をしたい」「解明してみたい」と思っていることがありましたら、ぜひ埴輪を作るように研究という形にしてみたいはいかがでしょうか。**はにわばあ**も、新たな研究が発掘されるたびに、毎回わくわくしながら見守っています。

臨床研究室では皆さまの研究活動の支援をしています。科研費に応募してみようと思っている方、今は研究をしていないけれど、科研費に興味がある方、職種は問いません。ぜひ管理棟2階の臨床研究室のドアを叩いてみてください。また、皆様からの発掘情報を臨床研究室までお寄せ下さい。お待ちしております。

臨床研究室の はにわばあ